

氏名	中野真理
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲第180号
学位授与年月日	2014年3月26日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	荷風文学のヴィジュアルリティ —「知」が切り拓く美の表現— (Visuality in the Literature of Nagai Kafu)
論文審査委員	主査 教授 リチャード L. ウィルソン 副査 教授 片山 倫太郎 (鶴見大学) 副査 教授 小島 康敬 副査 教授 ツベタナ I. クリステワ

論文内容の要旨

本論文は、永井荷風の文学における「ヴィジュアルリティ」に光を当て、荷風の中に醸成された芸術観や美意識、豊かな知的基盤をひも解きながら、複数のテキストの分析を通して近代日本文学の開拓者としての永井荷風の姿を浮き彫りにしようとするものである。「ヴィジュアルリティ」とは読者の心に想像上のイメージを描き出す作用や性質であり、豊かなイメージを喚起する荷風文学は、まさにヴィジュアルリティに溢れたものであると言える。

筆者は、荷風文学のヴィジュアルリティを読み解くことが永井荷風の美意識と創作精神の新たな側面を掘り起こし、さらには日本の近代文学における彼の位置づけを再考するために不可欠のものであると考えた。ここで筆者は荷風文学のヴィジュアルリティを、①近代的ヴィジュアルリティ(荷風個人の体験や美意識、近代日本の社会環境・芸術環境から育成されたヴィジュアルリティ)と、②前近代的ヴィジュアルリティ(荷風の知的基盤とも言える日本の古典文学・視覚芸術から学び取ったヴィジュアルリティ)の二つの側面から成立するものと捉えた。そして本論文で筆者がより重点をおいて分析したのが、「前近代的ヴィジュアルリティ」である。荷風の読書記録や言説を辿って行くと、彼の中には古典文学や視覚芸術の豊かな知識が驚くほどに蓄積されていることがわかる。荷風は間違いなくこれらの芸術

からヴィジュアルリティのエッセンスを取り入れており、それが彼の創作活動に大きく貢献したと考えられる。そして筆者はこの「前近代的ヴィジュアルリティ」がどのように荷風の作品の中に取り入れられ、荷風個人の体験や近代という時代環境によって育成された「近代的ヴィジュアルリティ」と結びついているかということ、複数のテキストを取り上げながら分析した。

本論文は三つのパートから構成される。「第一部 芸術家・永井荷風の深層」では、荷風の生涯、外遊体験等、文化的・社会的環境、近代に対する意識等をふまえながら、文学者としての芸術観や美意識を再考し、ヴィジュアルリティを志向していく過程を詳しく見ている。「第二部 荷風文学の源泉—前近代的ヴィジュアルリティの発掘」では、荷風文学の重要な柱と言える「前近代的ヴィジュアルリティ」に目を向け、古典文学や視覚芸術の表現上の特徴や表現精神について分析している。ここでは漢詩を出発点とし、従来荷風研究の中では注目されてこなかった古代・中世の文学（和歌、『伊勢物語』、『枕草子』、『徒然草』）、そしてそれらと深い関係をもつ近世の文学（俳諧、狂歌、人情本）と、さらに視覚芸術（浮世絵、人情本の挿絵）を取り上げている。そして「第三部 テキストから読み解くヴィジュアルリティ」では、荷風が生み出したテキストから古典文学や視覚芸術に学んだ表現手法や美意識を抽出し、それが荷風の近代的ヴィジュアルリティとどのように共鳴し、何を表現しようとしているかを分析した。ここでは作品ごとの分析（『すみだ川』『風邪ごち』『恋衣花笠森』『日和下駄』『花瓶』『腕くらべ』『墨東綺譚』）とともに、荷風文学に頻出するモチーフの分析（月、雨、水の流れ、虫、落葉・枯葉、隠れ家）を試みている。

本論文を通して見えてきたのは、荷風は文学という芸術の新たな表現を開拓するためにヴィジュアルリティを重視したということである。それを後押ししたのは、アメリカ・フランスで得た芸術的刺激と、日本の伝統文化の破壊や近代の日本社会に対する反感であった。彼は西洋の地で「主観」を基軸にした描写法や、感覚表現・感情表現を豊かに盛り込んだ文学を学んだ。そして帰国後、日本の伝統文化の美に眼を向けるようになるのだが、その美が破壊され個人の自由な感情表現も抑圧されていく中で、失われていく美の価値をいかに言葉で描き出し、人間がもっている五感や感情をいかに覚醒させるかということを考えるようになった。こうして荷風は、美的イメージを通して読者の五感と感情を刺激するヴィジュアルリティを追究するようになる。そこで荷風が自身の創作世界に豊かに取り入れたのが「前近代的ヴィジュアルリティ」である。「前近代的ヴィジュアルリティ」の中に存在するもの、それは目に見えない「心」の世界を目に見える自然のイメージを通して表現する方法、テキストとコンテキストの共鳴によって様々な表象を印象づける表現、美的瞬間を捉えるミクロ的観察眼、五感の共鳴が描き出す空間の美、過去と現在の重ね合わせによって可視化される内面世界、複雑な感情を映し出す表情やしぐさのクローズアップなどである。

荷風はこれらを自身のテキストに豊かに盛り込んだのである。

しかし、荷風文学は「前近代的ヴィジュアルリティ」だけで成立するわけではない。そこには近代人としての感性が生きた「近代的ヴィジュアルリティ」の力も働いている。それは、「個」としての人物の外面的特徴、様々な状況の変化に伴って現れる人間の複雑な内面感情、ある瞬間における事物の変化、さらには社会の表と裏（光と影）、繁栄と荒廃の対比、葛藤や悲哀や絶望、江戸と近代の裂け目、失われて行くものの幻想性、無常の美といった様々な形をもって表れてくる。そして「近代的ヴィジュアルリティ」が「前近代的ヴィジュアルリティ」と融合した時、豊かな美的情調や複雑な内面感情の描出が可能になるのである。ここで注意すべきことは、荷風文学のヴィジュアルリティは美に目を向けさせると同時に、近代社会の中に隠された様々な現実をも浮き彫りにするということである。美的情調の中に人間が生きている世界の現実を描き出すことこそ荷風が切り拓いた新たな文学の形であった。それは自然主義文学とは異なるリアリティーの表現を獲得したのであり、ここに彼の文学の個性が光っているとと言えるだろう。

論文審査結果の要旨

2014年1月31日、リチャード L. ウィルソン、片山倫太郎（鶴見大学）、小島康敬、ツベタナ I. クリステワの各教授からなる博士論文審査委員会の審査が開かれた。審査では、冒頭に中野氏から論文について概要的な説明が行われた後、審査委員会から個別に質疑応答が行われた。

2013年5月28日に行われた中間発表では、中野真理氏の論文を改善していくための二つの課題が浮かび上がった。一つは永井荷風における古典文学の扱い方であり、日本文学の伝統における古代の和歌や歌物語、俳諧の理解がやや不足していた。もう一つは、文学あるいは19世紀～20世紀の美術における「ヴィジュアルリティ」についての論理的かつ歴史的な理解が不十分であったことである。最終的に提出された博士論文にはこれらの点がきちんと補充されていた。特に、中野氏が新たに付け加えた「前近代的ヴィジュアルリティ」と「近代的ヴィジュアルリティ」という考え方は、論文における考察や分析をさらにレベルの高いものにしたと言える。

2014年1月31日に行われた最終審査では、各審査委員からこの論文を評価する好意的なコメントとともに、いくつかの問題点に対する指摘や今後の課題につながる意見が出た。まず、外部審査委員である片山倫太郎教授は、中野氏の論文の全体的な考え方や主張を適切かつ有効なものであると認めた上で、これまでの他の荷風研究者の意見や批評との関係性をより一層明確にする必要があると指摘した。また、近代における個人主義の意識の表れ方についても、社会に対する荷風のスタンスと結びつけながらより具体的な議論が必要であると述べ、さらに日本の自然主義がロマン主義の影響を大きく受けていることを説明した。作品分析については、例えば『すみだ川』は全体的には丁寧に分析されているものの、論文中に登場する「悲哀」の概念は、登場人物が様々な個性をもっているがゆえに、すべての人物には当てはまらない場合があることを指摘した。また「個」の捉え方に関連して『すみだ川』における長吉の人物像についてより詳しい分析が欲しいという意見もあった。さらに、片山教授は『恋衣花笠森』と『溼東綺譚』を例に挙げながら、作品の不完全性やストーリーの破綻についても指摘する必要があると述べた。最後に、新橋や玉ノ井などについて「場所の特殊性」に関するヴィジュアルリティを詳しく取り上げると良いという意見が出た。またこの他、論文中の誤植や言葉の表現についてもいくつかの指摘があった。中野氏は片山教授の指摘を受け止め、訂正を試みることを約束した。

続いてクリステワ教授は、この論文が日本の近代文学研究にはあまり見られない「美」についての研究であることを高く評価し、荷風の優れた文章は「美」というアプローチが非常に有効なものであると述べた。一方、こうしたアプローチを根拠づけるため、先行研究をもっと詳しく取り上げるべきだと指摘した。また、文学は言葉の芸術であること、「ヴィジュアルティ」という用語には、直訳の「視覚性」だけでなく、「心象」すなわち感覚を通して心の中に再表現されたものという意味があることについて、論文中で強調するように勧めた。「近代的ヴィジュアルティ」の特徴もいっそう明確に示すべきだと指摘した。さらに、和歌の「ヴィジュアルティ」と絵画との関連性に触れて、論文中で和歌の概念をより詳しく考察していく必要があると指摘した。俳句についても同様であり、「聴覚」と「視覚」の結びつきを考慮する必要があると述べた。次に、『伊勢物語』の扱い方については中間発表の時点より大分改善したものの、『伊勢物語』の歴史的な役割（「選択」と「組み合わせ」の教材としての役割）について言及するとなお良いというコメントをした。最後に、明治時代になって古典文学のエロティシズムを排除する傾向が現れてきて、こうした傾向が荷風文学の評価にも良からぬ影響を与えたことに着目したうえ、エロティシズムが荷風の美意識においては極めて重要な要素であるので、それについても考察する必要があるという意見を表した。

小島教授は、本論文の内容を高く評価した上で、歴史学研究の視点から、荷風が置かれた状況について詳しい分析があると一層望ましい旨を指摘した。具体的に言えば、荷風が描き出す世界のイメージが荷風個人の生き方とどのように関係しているかということである。荷風の人物像は、好色であり儉約家であったこと、特に年老いてからは容姿や服装をほとんど気にせず生活していたことが知られている。これらは彼の文学における美的世界と一見矛盾するもののようにも見えるが、この落差をどのように説明したら良いのかを質した。それと関連し、荷風は社会の片隅に追いやられた人の視点を作品の中に温かな眼差しで取り入れおり、作家の「実」の生活と「虚」としての作品との「虚実皮膜」の関係をどのように読み解いていくかということも重要な問題であり、荷風のリアルな生活や生き方をふまえた上で作品を見ていくと、その「美」の世界が一層光を放つものとして見えてくるのではないかという意見を述べた。また、「ヴィジュアルティ」の定義と、「近代的ヴィジュアルティ」が「前近代的ヴィジュアルティ」に対して具体的にどのようなイメージとして描き出されているのか、より明確に伝わるような説明が欲しかったという指摘があった。最後に、ヴィジュアルティを重視した近代文学の作家として、荷風と比較するには誰がよいかという質問があった。これに対し中野氏は、荷風自身も高く評価していた樋口一葉、泉鏡花、谷崎潤一郎らの名を挙げた。

ウィルソン教授は、中野氏の論文が荷風文学のヴィジュアルティについて丁寧に分析し、

さらにそのルーツとなる古典文学や視覚芸術を追究したことについて、他の審査委員同様に高く評価した。そしてこの研究を今後充実させるためには、より詳しい比較分析や時代環境の研究が必要であると述べた。特に荷風文学のヴィジュアルリティは、(1)同時代の文学や批評、(2) 西洋の芸術文化における「東洋」の視覚化の問題（ジャポニズムやオリエンタリズム）、(3) 明治末から大正初期にかけての様々な視覚文化の発達（映画、写真、広告、同人雑誌や浮世絵研究）などと密接に結びついており、これらの問題にも目を向ける必要があると述べた。

以上、様々な議論や改善ポイントが浮かび上がったが、審査委員会では中野真理氏の研究が博士論文として高いレベルのものに達しており、永井荷風研究に大きく貢献するものであるという結論に達した。

審査委員会は国際基督教大学教育研究棟247号室において、2014年1月30日11時30分から13時40分まで最終口述試問を実施し、引き続き審査委員による最終判定を行った。その結果、提出論文は博士論文に値するに十分な内容を持ち、また学位申請者が自立的で高度な研究能力を有することを認めて、全員一致で本論文を博士論文として合格と判定した。